

第34回「校長・理事長・総長管区長の集い」（2022年4月28日－29日開催）

ともに歩み、橋をかける－新しいカトリック教育の可能性

参加者の感想

設問：ホアン・アイダル師の講演から、印象に残ったこと、わからないこと、知りたいことなど、好きなポイントで簡潔にまとめてください。

<感想>

※印象に残った言葉・内容等の箇条書きの場合／で列記

1	今の保護者は子どもたちに「失敗させたくない」「苦しい思いをさせたくない」と強く思う。それに対してカトリック校はアイダル師の視点をいかに提案できるか？ここに悩む。
2	精神的に悩んでいる子どもと緩和社会。「成功しなければ」という心持ちの危うさ、ご存じのとおり、私たちはカトリック学校の不確かな未来に直面しているので、「私たちには悲観する権利はない」（イエスの復活によりそれは取り去られた）ということをととてもタイムリーに思い起こさせてくれました。
3	現代のカトリック学校が何を自らの指標とするか、するべきかを再確認できました。資本主義社会の中で、「評価」されることと、教皇様の提示するカトリック学校としての意義との峻別ができました。
4	教皇様の「兄弟の皆さん」の引用が多くありましたので、分かりやすかったです。他者を中心とした世界観のお話の中で、学生に自分たちが生きている世界の問題を意識させること等、神様による人間学、他者のヒューマニズムに共感しました。
5	現代世界の問題が貨幣、資本主義の発達発展の中で、人間が利益と消費の関係の犠牲となってしまっていることを改めて認識しました。若者の生き方、考え方の根本に何が潜んでいるのかを考えさせられました。「『成功しなさい』これは支配の新しい定式である」このことは普段の学校現場で陥りがちであると気づくことができました。「進路保障」が学校教育の大きなウェートを占めている中で、この事を忘れないように心がけたいです。
6	カトリック校の教育目的が「決然と弱者を擁護する者」を育てるとは、頭をガツンとされたようだった。人生の目的は学ぶ目標を見つけるため。「絶望がありえない」も力となった。
7	哲学的考察であるが現代社会の傾向を言い当てている。
8	穏やかなお話しぶりで容赦のない痛いことを伝えていただいたと思った。教育の目的＝決然と弱者を擁護する者を育てること。 A：キリスト教学校ですべき2つのこと（①世界の問題を意識させ、②それを乗り越えるヒントを与える） B：“面倒くさい”ことを排除すると人間を排除することになる ABを心に留めていたい。
9	“苦しみ”が大きいほど“幸せ”になれるという点。苦しみと楽しみは双子である／「他者のヒューマニズム」＝他者（特に困っている人や貧しい人）を大切にし、その人たちから学ぶ姿勢を持つべきこと
10	自分の学校の教育目的は考えるが、カトリックという立場からの教育目的についてはあまり考えなかったことに気付かされた。（教会の中に位置づけられた学校という認識がなかったということ）
11	決然と弱者を擁護する者を育てる教育…これがカトリックの教育の目的である／学生が生きて

	いる世界の問題を認識させる。学生に問題を乗り越えるためのヒントを与える／苦しみを消せば幸せはない。苦しみと幸せは表裏一体である
12	学生と接する中で、教育の目的が決然と弱者を守る人を育てるという決意のすばらしさ。ランキング、偏差値で人の上下を決めることのないように。相対主義や無関心に陥りやすいことに注意、見せかけの寛容に自戒。
13	「他者のヒューマニズム」についてのお話が感動的でした。ただこの高次元の倫理教育には準備が相当に必要かと思いました。
14	何のために勉強するのか？という問いに「人のために」というところまで答えるだけでなく、それを学ぶために貧しい人のところへ出かけていくという体験も必要だということがよくわかりました。貧しい人から学ぶこと。
15	「決然と弱者を擁護する者」「緩和 사회について」「他者のヒューマニズム」…ゆるぎない“根”のようなものを感じられ、力が湧く思いであった。
16	「教会はイエス・キリストを販売するのではない」という言葉。これは教皇様の表現なのだと思いますが、この言葉に寄って示された宣教の方法、“貧しさ・ゆるし・犠牲”ということを学校教育の中で伝え、生きることについて、その必要性和同時に、ある意味難さも感じましたが、この方法しかないことが心に留まりました。
17	わかりやすく、楽しく聞けたと同時に深みがあった。教皇フランシスコの新しい一面が見えた感じ。
18	フランシスコ教皇が教育に携わっていたということに身近に感じた。「廃棄の文化」の中に私たちはまさにいることを痛感した。
19	「苦しみの否定・排除」についてのお話が特に印象的でした。「他者のヒューマニズム」に重きを置く生徒を育てたいと改めて思いました。「相対主義」の弊害について具体的に知りたかったと思いました。
20	教皇フランシスコの思想の解説を通して、カトリック教育の目的と（それと不可分の）方法とをととても力強く簡潔に教えていただいたと感じ、感謝しています。
21	他者のヒューマニズムから神へ、という順序より、神に出会い神の考え方に生きることによって他者に真の関心をもつという順序が、たぶん現代に不足しているのではないのでしょうか。聖書はもっと読まれ、黙想され、理解される必要がある。そこに神との出会い（キリストとの出会い）があるから相対主義は神という絶対者との出会いなしには乗り越えられないわけですから、やはり人間のことをみているだけではなく、神との関係で他者を見る必要があると思います。
22	教皇フランシスコのことばとして紹介されたいいくつかの中で「自分の考えを持たない人は他人の考えを借りる」ということで、現代の若真小野たちの文化の特徴を話されました。私も最近の生徒たちを見て、主体性や信念を貫くためには、毅然とした勇気が求められるものと思っています。教皇様も「成功しなさい」と言っているそうですが、私も生徒に地震やほこりを持たせるためには、小さな成功体験を数多く体験させることに尽きると考えています。
23	カトリック学校の教育目的とは（気になっていた）、他者を中心とした世界観ということ（なるほど納得した）
24	フランシスコ教皇の考え方（生き方）の視点がイエス・キリストが現代をいきているならどのような対応をするだろうか、と常に考えた行動、言動が見える。特に現代社会の価値観に対し

	て、「廃棄の文化」と指摘している点が印象深かった。
25	教皇フランシスコのアルゼンチン時代について、身近で教えを受けた方のお話をうかがい、改めて教皇としての発語の背景への理解が深まった。
26	「他者」のヒューマニズムという視点を通し、現代のキリスト者のミッションについて深く考えさせていただいた。「絶望する権利もなければ、その理由もない」とは、困難な時代を日々生きなければならないカトリック学校にとって強い励ましに感じた。
27	方法と目的はセットである。宗教心が薄れる中で「現代人にとってもイエスは魅力的な人」は印象に残った。相対主義＝無関心の連結が不明。相対主義にもよい点はないか？⇒専制主義との対比⇒よくない考えに抵抗できないことが問題。
28	「サマリア人の例えにあるように、世界には 2 種類の人がいるだけである」印象に残りました。
29	利益と消費の社会、偶像を作ってしまった、状況という偶像があるということが意識できた。苦しみを否定、排除しようとする社会。苦しめば幸福になれるのか？
30	教皇フランシスコの教育に関する熱意、思いがよく伝わってきた。
31	弱き者を擁護する、寄り添う者を育てるのがカトリック学校の目的／世界を変えるためには考え方を考える、教育を変える／緩和社会の問題点。以上 3 点の指摘に改めて教育のあり方を考えました。
32	決然と弱者を守ること。教皇フランシスコのことばをもう一度読み直そうと思った。
33	相対主義と絶対主義においての違いが何を中心にするかで恐ろしさがわかりました。カトリック学校としては神様を中心にするべきと理解できました。イエズス会の「他者のために」という教育の一貫性を強く感じる事ができました。
34	印象に残り、改めて考えていきたい。神や超越についての問いが響きにくいと感じていて、その背景には苦しみを否定したり排除する世相があるということ。学生が生きている世界を意識させる、また問題を乗り越えるためのヒントを与える（他者を中心とした人間観）
35	教育の本質が人にあり、そこにはない単なるイデオロギーであるということ。相対主義、他者が先。
36	カトリック学校が目指す教育が、社会が求める人間像によってぶれないように教皇様の教育観をしっかり学びたいと思った。「他者を中心とした世界観」に感銘を受けた。
37	現代の「廃棄の文化」の特徴として「成功しなさい」と挙げておられました。私たちも生徒に同様のプレッシャーを与えているのではないかと、思いました。特にカトリック校の中高校は進学校が多いので、生徒に「合格して成功せよ」と圧力をかけているのでは。
38	学校が陥りやすいワナが示された。方法と目的に分けることはできない。セットであることが印象に残った。苦しみの理解が深まった。
39	カトリック学校で行われる教育の重要性。カトリック学校の教育の目的は「決然と弱者を擁護する者」を育てること。「ともに生きるわずらわしさ」の中で学ぶ。（私たちは「人を助けるために勉強する」）
40	教育の目的「決然と弱者を擁護する者を育てる」自分自身の生き方、教職員への呼びかけ、保護者への説明、児童への指導に対する指針を示していただいた。
41	「廃棄の文化の特徴」で「成功しなさい。これは新しい定式である」は、自分だけではなくと

	<p>いう利己的な意味ということなののでしょうか？それとも「他者に対する責任」が重要なので、基本的に異なるということなののでしょうか？</p>
42	<p>「他者に対する義務」まず「他者を見る」→見る機会をどのように設けるか？／学内で他の生徒をどう見るか？その見方をどのように伝えるか？</p>
43	<p>カトリックという宗教としての出発点「他者に対する責任」を負う人間を育成することの大切さをもっと社会に発信しなくてはいけないと感じた。そのためにもカトリック教会組織との連携をもっと深めなければならないと感じた。</p>
44	<p>本校では「グローバルシティズン（「神の恵みに感謝し、地球社会の一員であることを自覚し行動する人」の育成）を学園の教育目標に掲げています。今回の①学生が生きている世界の問題を意識させること。②学生に問題を乗り越えるためのヒントを与えること。この2つの視点が本校の教育の中に行き渡っているかという見直す視点であると感じました。</p>
45	<p>他者のヒューマニズムとは隣人の聖なる偉大さをながめ、あらゆる人間の中に神を見つけ、神の愛に頼むことでともにいきることのわずらわしさに妙、他者の幸福を望んで神の愛に心を開くことのできる兄弟愛です」がとても好きです。</p>
46	<p>話を聴きながら、机の上にある回勅「兄弟の皆さん」が呼びかけているのが聞こえました。講話後、毎日少しずつ読んでいます。回心を促す言葉でした。</p>
47	<p>「決然と弱者を擁護する者を育てる」という目標を、日々の教育活動のなかでいかに具体化するかがわれわれの極めて大きな課題だと感じました。</p>
47	<p>印象に残った言葉 ①相対主義は見せかけの寛容です。寛容を隠れ蓑にした無関心にすぎない。 ②苦しみの否定 排除 「緩和 society」 今の社会は苦しみをいかに和らげたり取り除いたりするかが大切であるという考えが主流になっていると思う。しかし、苦しみを否定せず向き合うことをしないと人間としての成長の機会を逃してしまっているのではと感じた。学校でも教育的配慮という言葉で苦しいことから遠ざけ、本来学校で身に付けさせなくてはならない力をつける教育の機会を与えなくてはならないのではないかと感じた。教育的配慮が見せかけの寛容になってしまっていないのか考えさせられた。</p>
49	<p>あまり考えた事が無かったベネディクト 16世とフランシスコ教皇との共通点について理解を深めることができた。教育者「決然と弱者を擁護する者」</p>
50	<p>大変分かりやすく、これからのカトリック学校で生きる人間に示唆と勇気を与えてくださるお話でした。教皇様のお言葉『教育を変えることでしか、世界を変えることは出来ません』『決然と弱者を擁護する者を育てる』なども改めて考えさせられました。</p>
51	<p>沢山のキーワードを頂きました。「現代はお金にハイジャックされた飛行機」(行きたくないところに連れていかれる)「苦しみと幸せは双子(ニーチェ)」「本当に人を助けようとするれば、見事に面倒くさいことになる」「相対主義は見せかけの寛容」「人間を人間にするのは他者への責任」等、一つ一つのお言葉に、これまで上手く言葉にできなかった疑問や葛藤の正体を見つけることができました。ありがとうございました。</p>
52	<p>カトリック学校の教育目標は「決然と弱者を擁護する者」を育てることにあるという点が印象に残りました。建学の精神を突き詰めていくと、社会に抗わざるを得ないことが出てくると思いますが、そういう現代社会の中にどっぷり浸かっている自分がそこに気付けるか、そこがま</p>

	ず課題です。
53	印象に残りましたこと(出発点は他者に対する責任が一人ひとりにある)弱い人、助けを必要としている他者に関わることで、自分も正され存在価値を自分の中に見いだしていく。いかされていく。学校の生活の中で見直したいと思います。

<印象に残った言葉など>

1	学生が生きている世界の問題を意識させる／学生に問題を乗り越えるためのヒントを与える／貧しい人々から学ぶ、人を助けるために勉強する
2	他者が先、自分が後、自分からスタートしたら他者へいけない／他者を中心とした世界観・苦しみと幸せは双子
3	人間存在に先ずは他者がいて、そこに自分がある。
4	カトリック学校の教育の目的について／達成、業績のパラダイム／現代人は礼儀正しく、無関心
5	貧しい人から出発した時、キリスト教的価値観が見えてくる＝人生の目的、勉強の目的を学ぶ。(方法と目的はセット)／何かを犠牲にしなければ人を助けられない＝リスクをとらなければ学校は守れない／学校を守ることが目的ではない＝ひとりでも多くの人が神と出会うため
6	「成功しなさい」：人はあまりに忙しく自分の人生を浅く生きている＝人間の機械化／「相対主義」：自分の考えを持たない人は、他人の考えに乗る＝インターネット社会／成功しなさい—(対比)—失敗して十字架につけられたイエズス
7	「他者に対する責任」と「自分を愛せない人は他者も愛せない」ということが相克するという考え方／相対主義は寛容であるが無関心になる／「廃棄の文化」というのが分かりにくかった
8	カトリック教育の目的は「決然と弱者を擁護する者を育てる」／キリスト者が否かではなく、「自分をさきにする人か人をさきにする人か」→キリスト者の裏表／他者を大切にすることは神に出会う人。めんどうだから喜びがある。
9	他者に仕える、それができるのは人間だけ／苦しみと幸せは双子／ただ 2 種類の人がいるだけ。痛みを介抱する人と離れて通り過ぎる人
10	現代における文化の捉え方／苦しみと幸せの関連／他者のヒューマニズムの徹底
11	教育の目的は弱者を擁護する者を育てる／現代人には自由に選んで契約を結んでいるが、契約の奴隷になっている。スキルがあって抵抗しない人／現代は苦しみを否定し排除しようとしている。面倒なことの排除／人を助けるためには犠牲や苦しみなしにはできない／失敗して十字架につけられた人を伝えたいなら「成功しなさい」とは言えない／他者と自分どちらが大切か／聖書は問題を他者の視点から見ることを教えてくれる。他者に対する責任がある
12	カトリック教育の目的—決然と弱者を擁護する者を育てる／現代社会の問題(学説が生きている世界の問題)を意識させる／その問題を乗り越えるための道ヒントを与える→他者を中心とした世界観、ものの見方を学生に伝えるべき
13	聖書の教え：すべてのことを他者・弱者から見ることを教える／者に出会うと必ず神に出会い、キリスト教的価値観は理解される／生徒の生きている世界の問題を意識させる／生徒に問題を乗り越えるヒントを与える

14	現代社会と教育／現代の意味付け／他者を中心とした社会観…社会とは
15	教皇フランシスコが教育関係の仕事をしていた点は驚いた／教育を変えることでしか世界を変えることはできない／「決然と弱者を擁護する者を育てる」ことが教育目的
16	「人を先にする人と自分を先にする人の2種類しかいない」 ①世界の問題を意識させる。②問題を乗り越えるためのヒント
17	他者を中心としたものの見方をまず持つ世界観を／教皇様が教育についてしばしば宣べていらっしゃる事、社会を変えるために教育を変えてゆく＜カトリック教育の学校の存在＞
18	弱い人を支えることのできる人を育成する教育／他者に働きかける
19	決然と弱者を擁護する者を育てる＝カトリック学校の教育目的／「これは何ですか」ではなく「私は何をすればよいか」
20	フランシスコ教皇のカトリック教育の目的は「決然と弱者を擁護する者」を育てるという言葉／二種類の人間：倒れた人に気付いてかがむ人と目を背けて先を急ぐ人／イエスのやり方：「貧しさ」「赦し」「犠牲」
21	すべての問題を他者、特に弱者の視点から見ることの大切さ／“善きサマリア人”、決然と弱者を守る側に立つ者／他者のヒューマニズムが相対主義、無神論、絶望から救う／自己からではなく、他者から出発する。
22	弱者を徹底的に擁護する教皇フランシスコの態度
23	教育の目的「決然と弱者を擁護する者」（教皇フランシスコ）／学生に対し、①生きている世界の問題を意識させる②生きている世界の問題を乗り越えるためのヒントを与える（ポイント：神様による人間学）／人間は他者に対する義務がある。「私は何をすればよいか」／善きサマリア人の例えに見る2種類の人間／現代世界…廃棄の文化、苦しみの否定・排除、相対主義または無関心
24	「自分を愛せない人は他人を愛せない」は半分正しいが、他者に対する責任が先、自分は後。／相対主義は見せかけの寛容です。寛容を隠れ蓑にした無関心にすぎない／面倒くさいこと、何かを犠牲にしなければ、人を助けることはできない
25	世界を変えたいならば、教育を変えるしかない、それが2代の教皇の重要なテーマ／弱者を擁護する者を育てる教育でなければならない／本当に困っている人に出会うと自分のコンプレックスは小さいものとなる
26	教育を変える事でしか世界を変える事は出来ない／戦争が人を救うわけではない